

第2回 AAA 大会に 参加して

鈴木 佳子
光畑 雅宏
吉垣 茂

大学は休暇中ということで、学園都市ジョクジャカルタは静かな町のような感じだったが、折りしもマホメット聖誕祭ということで夜市には人があふれていた。同じ様な熱気が大会会場となったガジャマダ大学の大学センターでも感じられた。このアジア養蜂研究協会第2回大会に参加して一番強く受けた印象は、インドネシアは養蜂業の育成および発展にたいへん熱心である、ということだった。会議において、インドネシアの研究者、養蜂家の人々、政府関係の人々が、他国の研究者の発表を興味深く聞き、また盛んに質問をしているが目を惹いた。

特に大会3日目に行われたテクニカルビジットにおいては、会議の行われていたガジャマダ大学のあるジョクジャカルタより200kmほど離れたパティにある養蜂場を見学したが、そこへの移動に当たり5時間ノンストップ、トイレ休憩もなしだったのには驚いた。参加者にも堪えた道のりだったので、バスの運転手はさぞかし辛かったことだろうと思う。現地の村には新しくこの会議のために立てられたらしい案内表示や説明が書かれた立て札が随所にあり、この大会にかける主催者森林省関係者の意気込みが感じられた。

最終日のフェアウェルパーティーでは、このパーティーのために、ミツバチや農家、養蜂家などが登場するように作られた物語に、伝統的なインドネシア舞踊をベースにした振り付けをした(伝統のガムラン楽器を使いながらも音楽はかなりモダンだった)アトラクションを見せてくれた。ミツバチらしい衣装にも凝っていたが、交尾飛行やポリネーションなどをリアルに踊りで表現していて、楽しく美しいというだけ

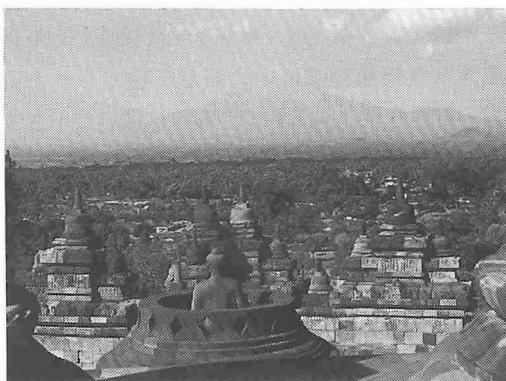


図1 ポロブドゥールの遺跡からメラビ山を望む
でなく興味深くもあり大変よかったと思う。

ジョクジャカルダが古都だからか、インドネシアの人々は思いの外穏やかでのんびりもしていたが、若い大学のスタッフや学生が大会を成功させようと一丸となっている姿には感心させられた。(鈴木 佳子)

自分自身としては2回目の海外旅行が学会参加のためのものとなるとは予想だにできなかった。当初は先生方にこのことについて行って、時間の合間を縫っては昆虫採集でもしようかと呑気に構えていたのだが…。不幸にもというのか幸いにも国際的な学会での発表の機会を得た。

アジア養蜂研究協会大会と聞いていたので、参加されている方はアジアの方々だけかと思っていたのだが、欧米諸国の方々も数多く参加されていた。私の発表は「日本産マルハナバチにおける蜂児に対する保温行動」と題して、ポスターで行った。ミツバチ関連の発表ではなかったので、それほど関心を持たれないだろうと高を括っていたのだが、以外にも多くの方々に聞いていただき、またご意見をいただいた。中で

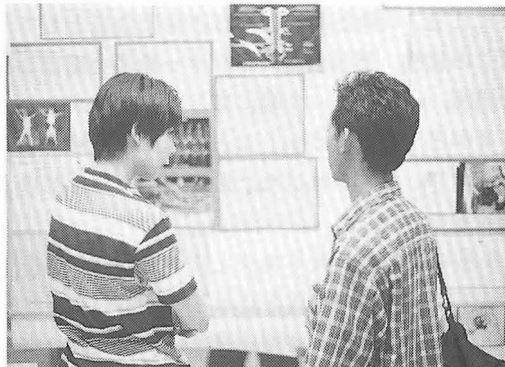


図2 ポスター発表を行う鈴木佳子さん

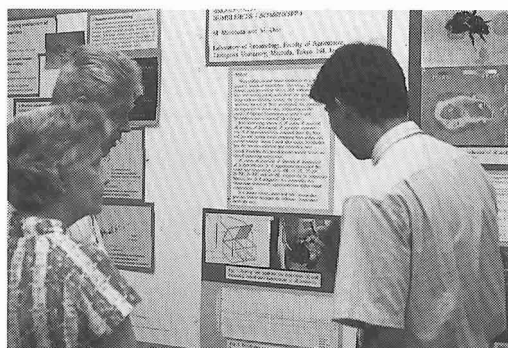


図3 ポスター発表を行う光畑雅宏君

も、フェルトハウス氏とお話をさせていただいたことは(松香先生にずいぶん助けていただいたが)、私自身にとってたいへん感激的なことであり、大きな収穫であった。また、彼のご子息とも仲良くなることができた。彼も国際的な学会には初めての参加で、しきりにすばらしい学会だと語ってくれた。

片道5時間、パトカーの先導で訪れた養蜂場見学では、ミツバチやマルハナバチと同じミツバチ科に属し、高度な社会性を営むハリナリバチ(*Trigona* 属)のコロニーを目の当たりにしてじっくりと観察することができた。ハリナシバチは竹筒の中で飼育されており、トウヨウミツバチの巣箱と並んで吊されていた。周りの養蜂家が近代化していく中で、そこはインドネシアの伝統的な養蜂を今もなお続けているのだが、その場所だけは何故だかゆっくりと時間が流れているようで、非常に快く感じた。さらに前々から一度実際に見てみたいと思っていたオオミツバチや大会期間中ではなかったが、コミツバチの自然巣も手にして見る事ができた。

初めての国際的な学会で緊張することも多かったが、様々な人々に出会い、多くの知見を得られたことは大きな喜びとなった。(光畑雅宏)

インドネシアのガジャマダ大学で、第二回アジア養蜂研究協会大会が開催された。大会全体としての発表内容は、養蜂やポリネーションに関する内容が多く感じられたが、サクブルードやミツバチヘギイタダニについても報告されており、またハチミツの抗菌作用についての研究報告も興味深かった。

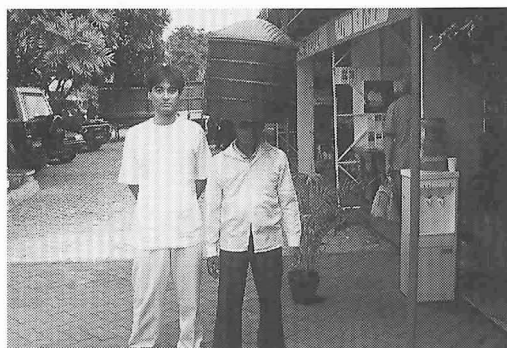


図4 海外での見聞を広めた吉垣 茂君

玉川大学ミツバチ科学研究施設では、学会期間中に絵はがきを販売したが、初日でほとんど売る尽くすほどの人気であった。

28日にインドネシア主催のテクニカルビジットとして、パティの養蜂家と養蜂園の見学が行われた。ジョクジャカルタからパティまでの道のりは、ジャワ島を南から北へと縦断するかたちで、バスの窓から見る景色は変化に富んでおり大変美しく、また南と北で農作方法が違うのには驚きと興味を感じた。現地では養蜂家による蜂髭のパフォーマンスや採蜜の実演が行われた。また、木の上に箱をぶら下げ、トウヨウミツバチが自然に巣を作れるようにした、昔ながらの方法が目をついた。

インドネシアは世界史の本にしばしば出てくるほど歴史のある国で、特に有名なボロブドゥール寺院は、その規模と美しさで期待を裏切らない見事な遺跡だった。

最終日のフェアウェルパーティーでの「bee—dance」は、伝統舞踊に新しい技法を取り入れたもので、この学会のために作られたミツバチを主題とした素晴らしい作品であった。

今回の学会は、私にとって初めての海外旅行だったが、他国の文化に接し人々とふれ合うことで、今までとは違った観点で物事を捕らえることができるようになった。日本では味わえない体験が多く、大変勉強になり参加できたことに満足している。次回のベトナム大会にも多くの学生が参加してほしい。(吉垣 茂)